

Fujitsu Technology and Service Vision

Dynamic transformation

Introduction

- 02. [混迷する時代に立ち向かう](#)
- 03. [テクノロジーで、より良い未来を切り拓く](#)
- 04. [経営を揺るがす外部環境の変化](#)
- 05. [AIがあらゆるビジネスを変える](#)
- 06. [仕事や社会のあり方も変わっていく](#)
- 07. [変化が常態化した時代の経営](#)
- 08. [Dynamic transformation](#)

Technology vision

- 09. [変革を駆動する4つのダイナミクス](#)
- 10. [Dynamic intelligence](#)
- 12. [Dynamic exploration](#)
- 14. [Dynamic orchestration](#)
- 16. [Dynamic ecosystems](#)
- 18. [富士通のR&D](#)
- 22. [信頼できるテクノロジーの提供](#)

Actions toward transformation

- 23. [変革に向けたアクション](#)
- 24. [テクノロジーがもたらす産業の変化](#)
- 26. [Dynamic transformation推進の鍵](#)
- 27. [変革を実現するキーファクター](#)
- 32. [実践をベースにAI-drivenへの変革をリード](#)
- 33. [変革のパートナー](#)
- 34. [世界中のお客様とともに](#)
- 35. [2035年の世界に向けて](#)



混迷する時代に立ち向かう

世界は、予測不能な変化が常態化する時代に突入しています。地政学的緊張の高まりは、世界経済の不確実性を一段と高め、サプライチェーンの再構築やエネルギー・資源制約の深刻化を招いています。さらに、AIの急激な進化は、テクノロジー産業を起点として、ビジネスモデルや雇用のあり方に大きな影響を与えています。実際、2026年2月には、世界のソフトウェア関連企業の時価総額が20～40%下落¹⁾、大規模な人員削減の動きも顕在化しました。

エネルギーや資源を巡る課題は、もはや特定の業界にとどまらず、あらゆる産業に波及しています。同様に、AI導入の加速に伴い、その破壊的なインパクトはテクノロジー産業を超え、他の産業へと広がりがつあります。このような環境下において、エネルギーや資源の安定供給を前提とし、従業員や保有資産を増やすことで成長を遂げる——そうした従来のビジネスの常識そのものが、今まさに揺らいでいます。

企業に問われているのは、「次々と起こる個々の変化に対応するか」ではありません。この混迷の時代に立ち向かうために、経営から現場に至るまで、企業活動のあらゆる領域をどのように変革し、組織全体として成果を生み出し続けられるかが問われています。

Fujitsu Technology and Service Visionでは、テクノロジーがもたらす変化を踏まえながら、企業が取べき変革に向けたアクションと、それを実現するために富士通がどのような価値を提供できるのかを提示していきます。

1) Short interest increases as software stocks reprice, S&P Global, 2026



テクノロジーで、より良い未来を切り拓く

世界は今、地政学的な分断や気候変動の深刻化、労働人口の減少といった、様々な課題と向き合っています。また、AIをはじめとするテクノロジーの急激な進化は、産業構造における破壊的変革を一層促し、既存の業界ルールや価値を根本から覆していきます。

このように変化の激しい、先の予測が難しい時代においては、企業が自社の成長について明確な数値予測を示すことが困難であり、そのため、今後どのような成長軌道を描いていくのか、どのような貢献を果たしていくのかを、ビジョンをもって社内外に示すことが重要となっています。

富士通は、テクノロジーを生み出し提供する企業として、テクノロジーによってどのような未来が実現されていくのかを世の中に示すことも責務であると考え、Fujitsu Technology and Service Visionを通じて、テクノロジーの進化とその実践の方向性について発信しています。

このFujitsu Technology and Service Vision 2026では、AIを中心とするテクノロジーをビジネスのあらゆる領域に実装し、ビジネス全体を再構築することを提言しています。テクノロジーによって駆動する企業へと変革することで、市場変化に動的に対応し、新たな機会を捉え、持続的な成長につなげていく——そのための富士通の考えを示しています。

また、本年5月に、10年後となる2035年に向けてテクノロジーはどのように進化し、そして当社がその世界に対しどのように貢献していくのかを示した中長期の経営ビジョンを発表しました。AIが社会や産業のあらゆるところにひろがった2035年の世界に必要なテクノロジーを生みだしながら、当社自身も、すべての企業活動をAIで駆動させるAIドリブンの企業へと変革していきます。そしてカスタマーゼロの自社実践で得た知見を共有していくことで、お客様とともに混迷の時代を乗り越え、未来を切り拓いていきます。

2026年6月



富士通株式会社
代表取締役社長 CEO

時田 隆仁

経営を揺るがす外部環境の変化

世界は想定を超えるスピードで変化し続けています。こうした外部環境の変化を捉えるため、富士通ではCxOを対象とした調査を継続的に実施しています。2026年2月に実施した調査¹では、ビジネスにおける脅威となる外部要因のトップに、「サイバー攻撃の激化」が挙げられました。

調査後も、新たな紛争の発生など、企業が対応すべき外部環境の優先順位に影響を及ぼす事象が相次いでいます。こうした変化が連続する中で、従来の経営サイクルのままで対応することは、今後ますます困難になると予想されます。

さらに、AIの進化により、人間の認知や判断の限界をはるかに超えるスピードでサイバー攻撃が実行可能となり、社会インフラや企業システムに対するリスクは一層高まっています。テクノロジーの進化が、企業経営をどのように変えていくのか、継続的に注視していく必要があります。

経営への脅威となる外部要因

サンプル数：1,000

1位	サイバー攻撃の激化	テクノロジー
2位	地政学的緊張・紛争	政治
3位	金融市場の不安定化	経済
4位	自然災害の激甚化	環境
5位	労働人口の減少	ウェルビーイング

1) 2026年2月に、富士通がDynataに委託し、北米、欧州、APACの10カ国1,000人のCxOに対して実施した調査

AIがあらゆるビジネスを変える

想像を超えるAIの進化が、あらゆる業務の自動化や高度化を加速させ、産業全体の变革を促しています。

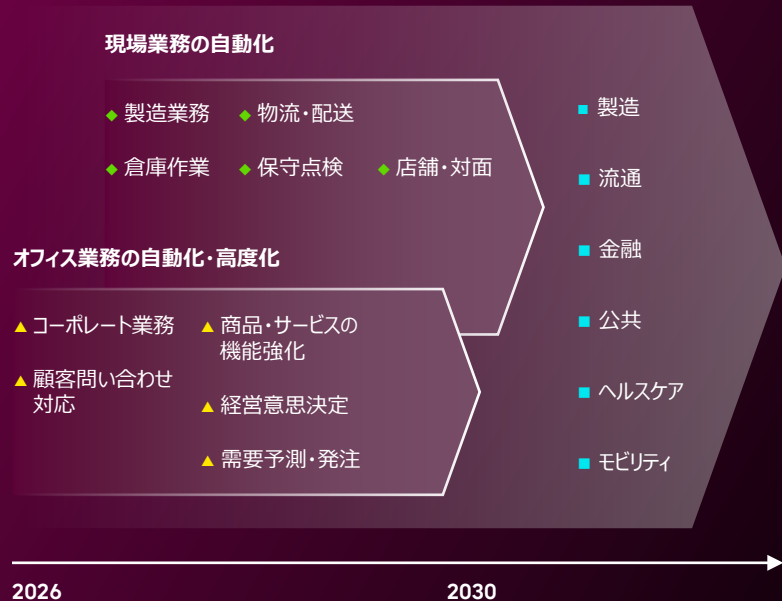
AIの適用領域は、オフィス業務の自動化・効率化にとどまらず、商品・サービスの機能強化や経営の意思決定の高度化へと拡大しています。富士通の調査によると、オフィス業務へのAIの適用率は40%を超え、今後3年以内に90%を超える企業がオフィス業務のほぼ全領域でAIを適用する計画を立てています。

さらにAIは、現実世界を理解し制御するフィジカルAIへと進化し、現場業務の自動化を一段と加速させていきます。現状、AIやロボットの適用率は30%台にとどまっていますが、今後3年以内に約90%の企業がAIやロボットによる自動化に取り組む意向を示しており、現場の变革が急速に進展すると見込まれます。

オフィスにおける知識労働を变革してきたAIの波は、フィジカルAIの進展により現場へと広がり、製造、倉庫、物流、保守、店舗などの業務のあり方を再定義していきます。AIのインパクトはあらゆる産業に波及し、競争のルールを変え、産業構造を大きく揺るがしていきます。この巨大な潮流に対し、企業には本質的な対応が求められています。

AIが、オフィスから現場に広がり、企業や産業を变革

企業・産業の变革



図は富士通が実施した調査データを基に富士通が作成



仕事や社会のあり方も変わっていく

AIの進展は、わたしたちの仕事に構造的な変化をもたらしています。世界経済フォーラムのレポートによると、人が中心となって担う仕事の割合は、2025年の47%から2030年には33%へと減少し、人が中心の仕事、テクノロジーと協働する仕事、テクノロジーが担う仕事それぞれ約3分の1ずつを占めると見込まれています¹⁾。これにより、人の役割は、業務を遂行する主体から、AIやロボットと協働しながら価値創出をリードする存在へとシフトしていくことが想定されます。

社会のあり方も大きく変わろうとしています。富士通の調査では、70%以上のビジネスリーダーが、テクノロジーによるイノベーションが、雇用・医療・教育における格差の縮小や、複雑な社会課題への対応の加速につながると回答しています。

テクノロジーが社会に新たな変化をもたらす中で、企業は、どのように価値を創出し、社会と向き合っていくのかを問われています。

仕事における人の役割が変わっていく

	人が中心	協働	テクノロジー中心
2025	47%	30%	22%
2030	33%	33%	34%

1) Future of Jobs Report, World Economic Forum, 2025

テクノロジーによるイノベーションが、社会を大きく変えていく

イノベーションによって、雇用、医療、教育における格差が縮小

73%

サンプル数：1,000

AIやデータの流通によって複雑な社会課題への対応が加速

78%



変化が常態化した時代の経営

これまでも環境変化は常に生じてきましたが、そのスピードは加速し、企業にもたらす影響の大きさや範囲は一層拡大しています。こうした変化が常態化する時代において、企業が持続的な成長を実現するためには、変化に柔軟に適応し学習することで、自らを絶えず変革し続けることが不可欠です。

これからの企業に求められるのは、社会や産業のあり方を大きく変える力を持つテクノロジーを核に、ビジネス全体を再構築することです。テクノロジーを単なる効率化の手段としてではなく、ビジネスを支える基盤そのものとして位置づけることが重要になります。

これまでの企業

- 計画を軸とした経営・事業推進
- 固定的な業務プロセスやルール
- テクノロジーは効率化の手段

これからの企業

- 変化への適応と学習を軸とした経営・事業推進
- 再構成可能な業務プロセスとルール
- テクノロジーは価値創出と意思決定の基盤





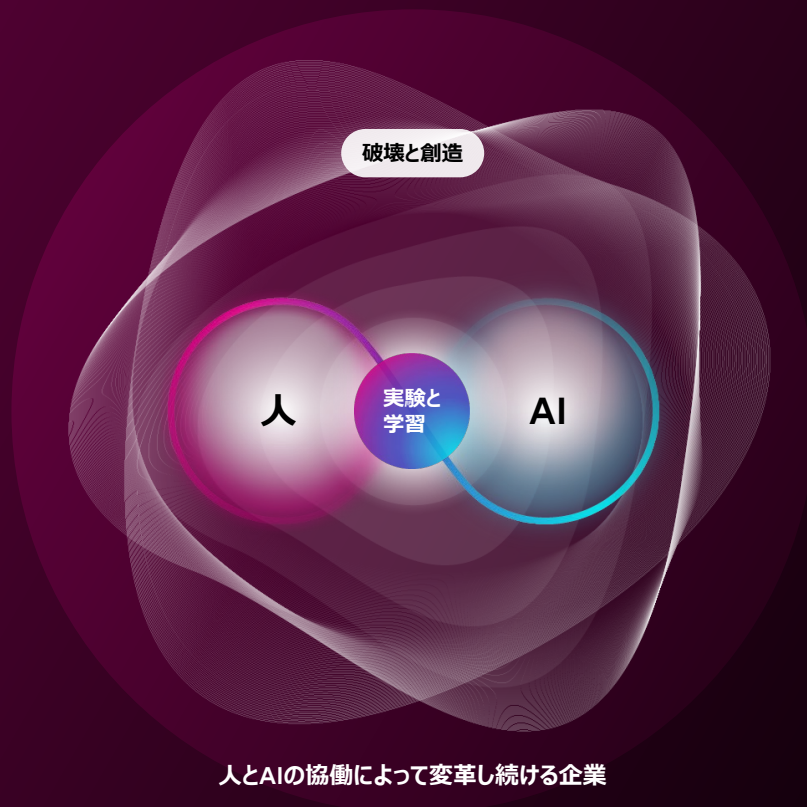
Dynamic transformation

変化が常態化した時代において、企業に求められるのは「計画の精度」ではありません。仮説を立て、検証し、結果から学ぶ組織能力が必要になります。科学の世界で実験を繰り返しながら発見を生み出すように、「実験と学習」のサイクルを高速に回転させ、ビジネスを継続的に更新していくことが重要です。

人とAIが協働してこのサイクルを回し、ビジネスの全領域に実装したテクノロジーを活用してビジネスシステム¹を動的に再構成していきます。そして、既存のビジネスモデル、戦略、プロセスを継続的にアップデートし続ける破壊と創造の経営変革を、わたしたちは Dynamic transformation と定義します。

この変革は、AI単独の力で実現できるものではありません。目的の異なる複数の変革の力を組み合わせ、一体として機能させることで、はじめて実現されます。

1) 販売・生産・人事など企業の業務活動を効率化し、競争力を生み出す一連の仕組みやプロセス



人とAIの協働によって変革し続ける企業

変革を駆動する4つのダイナミクス

テクノロジーは、変革を駆動する4つのダイナミクス（変革する力）を企業にもたらします。

Dynamic intelligence

人とAIが協働して「実験と学習」のサイクルを高速に回すことにより、新しい知識を創出しながらビジネスを実行。他3つのダイナミクスの中核をなす変革力。

Dynamic exploration

進化するコンピューティングパワーを活用し、イノベーションに不可欠な未知の領域探索を加速。

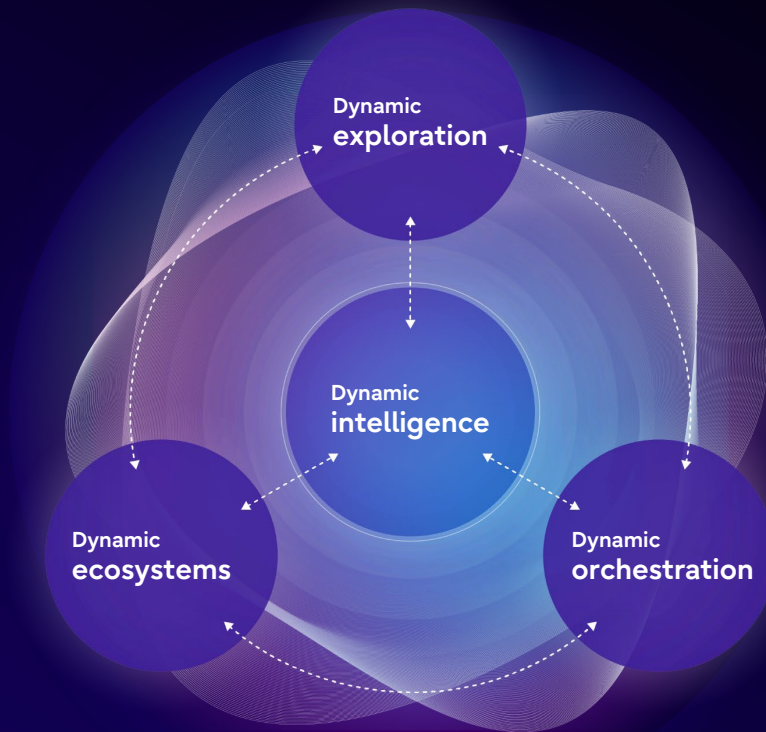
Dynamic orchestration

フィジカルAIを活用して実験と学習の成果を現場のオペレーションにリアルタイムに反映し、ビジネスシステム全体を動的に再構成。

Dynamic ecosystems

セキュリティとトラスト技術を活用して、外部環境の変化がもたらすリスクを予測し、エコシステムを自律的に再編。

これから、これらの力を活用して企業がどのように変革するのか、また進化するテクノロジーがそれぞれの変革においてどのような役割を果たすのかを見ていきます。





Dynamic intelligence

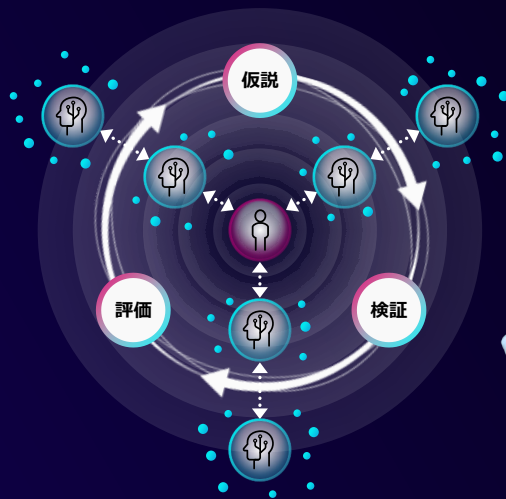
人とAIの協働により、知識をスピーディに生み出す

これまで人が担ってきた知識創造サイクルにAIエージェントが加わることで、人だけでは実現できなかった圧倒的なスピードとスケールがもたらされます。

AIエージェントは複数のAIと自律的に連携し、仮説の立案から検証までを高速に実行します。さらに、エージェント間で、検証結果を評価し、仮説を更新するサイクルを回すことで、人は目的の設定や最終的な意思決定に集中することが可能になります。これにより、企業は新たな知識を迅速かつ継続的に創出できるようになります。加えて、AIエージェントを数千、数万規模へと拡張することで、従来は従業員数に制約されてきた知識創造は飛躍的に拡大します。

人とAIの協働によって得られた知識は属人化することなく、エージェント同士の連携を通じて組織全体で共有されます。その結果、企業は有機的につながりながら環境変化に適応し続ける、ダイナミックな存在へと進化していきます。

知識創造サイクルの高速化



未来の兆し

業務を支えるデジタル従業員

米国の金融機関では、「デジタル従業員」と呼ばれる100体以上のAIエージェントが、組織に組み込まれています。これらのデジタル従業員は、相互に連携し、決裁の不備修正やソフトウェアの脆弱性修復を自律的に実行するとともに、上司への報告や承認申請も行います。

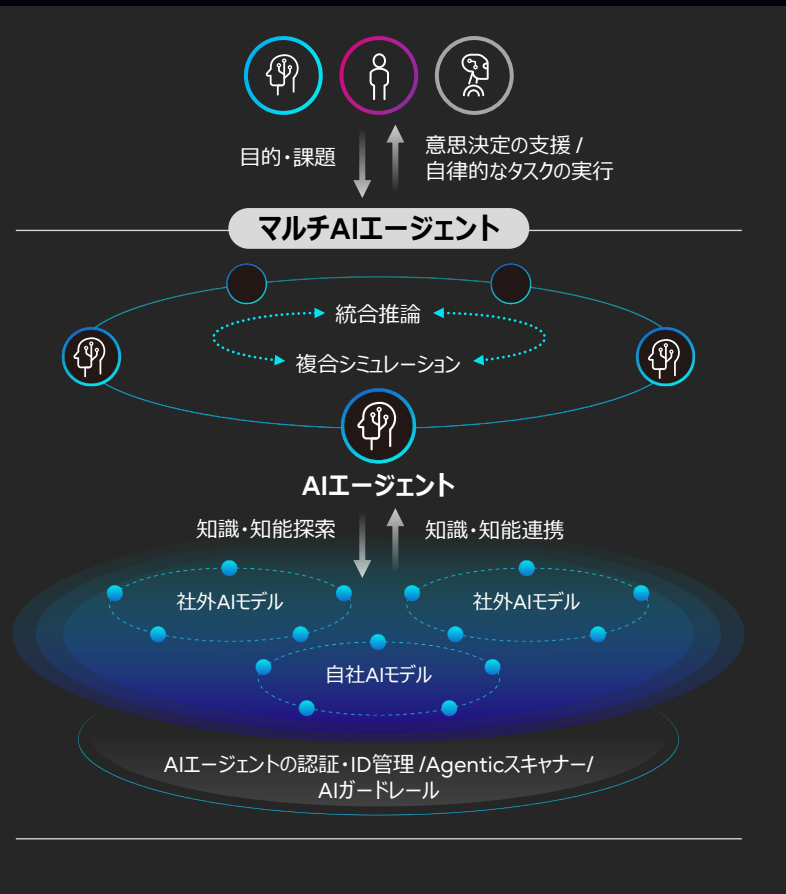
知識創造を高速化する マルチAIエージェント

自律的に思考し、協調しながら実行するAIエージェントの連携が、実験と学習のサイクルを加速させます。

AIエージェントは、現状を把握した上で、目的達成に必要な専門性を有する他のエージェントと協調し、複数の施策を立案します。さらに、社内外のAIモデルを探索・活用しながら統合的に推論やシミュレーションを行います。その結果を踏まえて人が意思決定を行い、AIエージェントが自律的に施策を実行していきます。

AIエージェントが企業活動の中核を担う上で、セキュリティ技術は不可欠な基盤となります。AIエージェントの認証に加え、脆弱性を迅速に検出・対処するAgenticスキャナー、AIエージェントの虚偽回答の生成や機密情報の漏洩を防ぐガードレールなどの技術が、AIエージェントの自律的な行動や安全な連携を支えます。

このサイクルを通じて得た知識や経験は、AIエージェント間で共有・蓄積され、発生した例外や暗黙知も継続的な学習を通じて「組織の能力」へと昇華されていきます。



Dynamic exploration

コンピューティングパワーを活用し、発見を加速する

AIが駆動する知識創造サイクルの実現には、AIを生み出し、その能力を最大限に引き出すコンピューティングが必要不可欠です。さらに、コンピューティングは、企業に未踏領域を開拓し、リアルタイムに課題に対応する力をもたらします。

コンピューティングの性能向上により、大規模かつ高精度なシミュレーションやデータ解析が可能となります。さらに、量子コンピューティングは、従来とは全く異なる計算原理に基づく新たなアプローチを提供し、未踏領域の探索を可能にします。

AIの進化によって、多くの企業がこのような高度なコンピューティングを活用できるようになります。これからは、AIが最適なコンピューティングリソースを自律的に選択・分配することで、企業は多様な課題にリアルタイムに対応できるようになります。

AIとコンピューティングの融合により、医療や新材料開発における新たな発見に加え、都市やサプライチェーンにおける複雑な課題の解決が期待されます。既知の領域を拡張し、課題に迅速に対応することが、企業の競争力を高めています。

未来の兆し 探索が競争優位になる時代

米国の創薬会社では、AIと大規模コンピューティングを組み合わせ、数百万規模の細胞実験データを解析しながら創薬候補を探索。ロボットによる自動実験と計算資源を連動させ、仮説生成・検証を並列化することで、従来数年を要した探索を数週間単位に短縮しています。

発見の加速



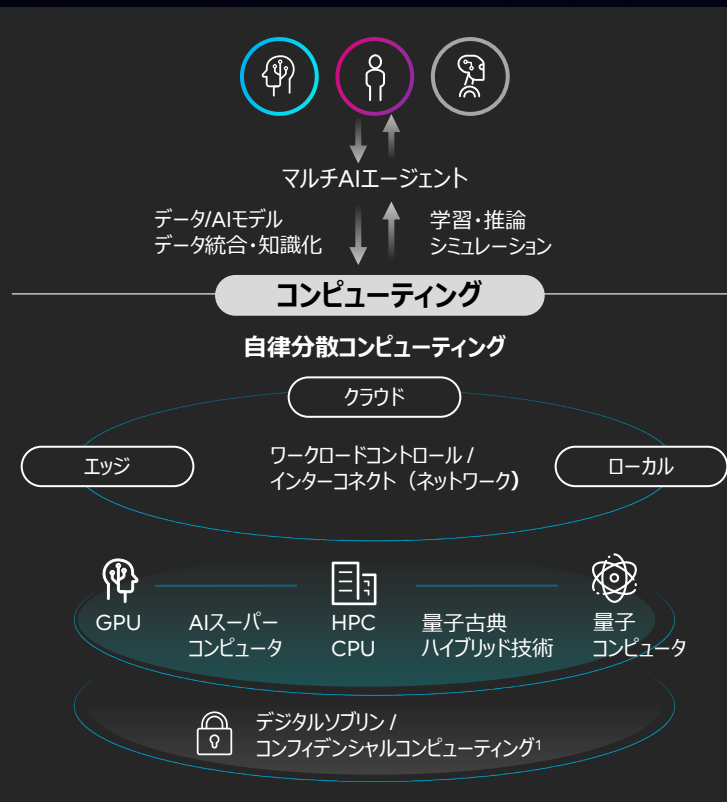
探索領域を拡張する コンピューティング

企業は、マルチAIエージェントを介して、高度なコンピューティングにアクセスすることで、探索可能な領域を広げ、新たな発見を生み出しています。

AIエージェントは、課題の規模や複雑性、必要となるデータやAIモデルに応じて、最適なコンピューティングリソースを自律的に選択し、推論やシミュレーションを実行します。特に、データや運用に主権を持つソブリンなどのセキュリティ要件を踏まえつつ、インターコネクトを介して超低遅延で相互に接続されたエッジ、クラウド、ローカル環境を適切に使い分けます。

超大規模なシミュレーションを必要とする未踏領域の探索においては、GPUを搭載し膨大な仮説を短時間で検証するAIスーパーコンピュータや量子コンピュータを活用します。さらに、これらを組み合わせ、計算能力を拡張することで、これまでにない科学的発見やビジネス価値の創出につなげていきます。

将来的には、分散したリソースを統合して、業務やビジネスの特性に応じて省電力で自律的に制御する、自律分散コンピューティングが実現されていきます。誰もが専門知識を必要とせず高度な計算資源を活用できるようになり、これまで解決が困難だった複雑な課題にも対応できるようになります。



1) 計算時にも暗号化したままデータを処理し、機密性を保護する

Dynamic orchestration

AIとロボティクスの融合で、ビジネスシステムを再構成する

企業は、デジタル世界における仮説検証やシミュレーションの成果を、現実世界の業務、さらには工場や店舗といった現場へと迅速に展開し、リアルな価値を創出していきます。

ロボティクス技術はすでに生活やビジネスの現場に浸透し、社会や企業の一員として機能し始めています。ロボットは、現場の状況をリアルタイムに把握し、シミュレーションを行いながら自律的にタスクを実行し、人はより高度な判断や業務に集中できるようになります。

このサイクルから得られた知識は、現場の人とロボット、さらにはロボット同士で共有され、AIを介して企業全体へと展開されます。また、現場の状況把握、シミュレーション、現場への展開というデジタル世界と現実世界が融合した改善ループが確立され、継続的に進化します。これにより、ビジネスの状況に応じて人とAI、ロボットが連携し、デジタル世界と現実世界を横断するシステムやプロセス全体をエンドツーエンドで動的に再構成できるようになります。



未来の兆し デジタルで決め、フィジカルに反映

英国の小売企業では、AIと大規模シミュレーションを活用し、在庫管理、ピッキング、ロボティクスの挙動を仮想空間で検証しています。そして、その成果を、3,000台規模のロボットが稼働する物流工程に反映しています。実機導入前に最適な運用方針を探索することで、オペレーション効率と安定稼働を同時に実現しています。

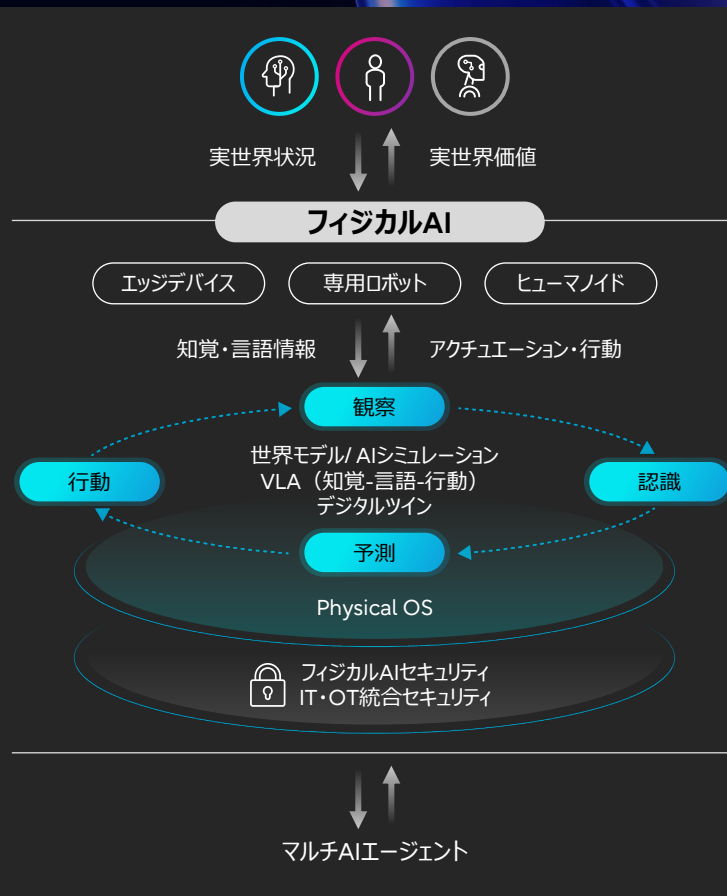
予測から現実世界を動かす フィジカルAI

現実世界を知覚し、自律的に判断・行動するフィジカルAIが、ビジネスシステムの動的な再構成を可能にします。

フィジカルAIは、人と同様に、視覚や言語を通じて現実世界の状況を観察・認識します。そこから得られた情報を基に、現実世界をリアルタイムに再現した世界モデルが将来の状況を瞬時に予測します。その結果を踏まえて、AIエージェントが次取るべき行動を導き出し、ロボティクスやエッジデバイスが実行します。実行結果は継続的に次の判断へとフィードバックされ、状況の変化に応じたリアルタイムな対応を可能にします。

人が定めた目的やガイドラインに基づき、AIとロボットが自律的に行動することで、ビジネスの変化対応力を高めます。一方で、サイバー攻撃によりロボットの誤作動など、事業活動や社会インフラの安心・安全を脅かすリスクも伴います。このため、フィジカルAIを守るとともに、ITとOTを統合し、システム全体を防御する新たなセキュリティ技術が重要になっていきます。

将来的には、異なる空間に存在するロボットや設備を包括的に連携させるPhysical OSによって、システム全体をオーケストレーションする「分散・協調型」へと進化し、ビジネスシステム全体を動的に再構成していきます。



Dynamic ecosystems

リスクを予測し、エコシステムを自律的に再編する

国際情勢の変化やサイバー攻撃の高度化が進む中で、外部パートナーとのエコシステムでは、継続的な見直しを行いながら新たな関係構築を進めていくことが必要不可欠です。

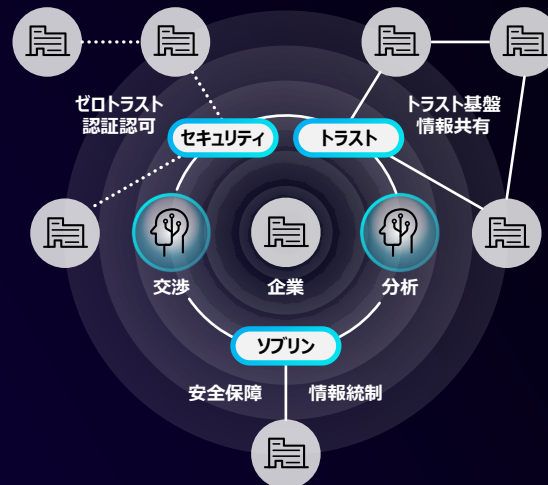
これまで企業は、人による契約や交渉を基盤としてパートナーとの関係を構築し、3つの異なるレベルでデータやAI、システムを共有してきました。

- トラストに基づきオープンに共有
- 認証などのセキュリティ技術を活用して共有
- データや運用の主権を守り、統制をかけて共有

今後は、AIエージェントとセキュリティ・トラスト技術を活用することで、外部環境の変化がもたらすリスクを予測し、既存パートナーとの契約内容やデータ・AIなどの共有レベルを継続的に見直すとともに、新たな関係の構築も進めていきます。

エコシステムを自律的に再編することにより、リスクを低減しながら、持続的な価値創出を実現していきます。

AIで再編されるエコシステム



未来の兆し つながる企業で広げる価値

ドイツの自動車OEMは競争力を自社の中に閉じ込めてきました。OEM、サプライヤー、素材・IT企業がデータ主権を保ったまま接続し、CO₂・品質・需給情報を業界標準で共有。企業の壁を越えた意思決定が、リスク管理と価値創出を同時に加速させます。未来の企業は、連携できる者が強くなります。

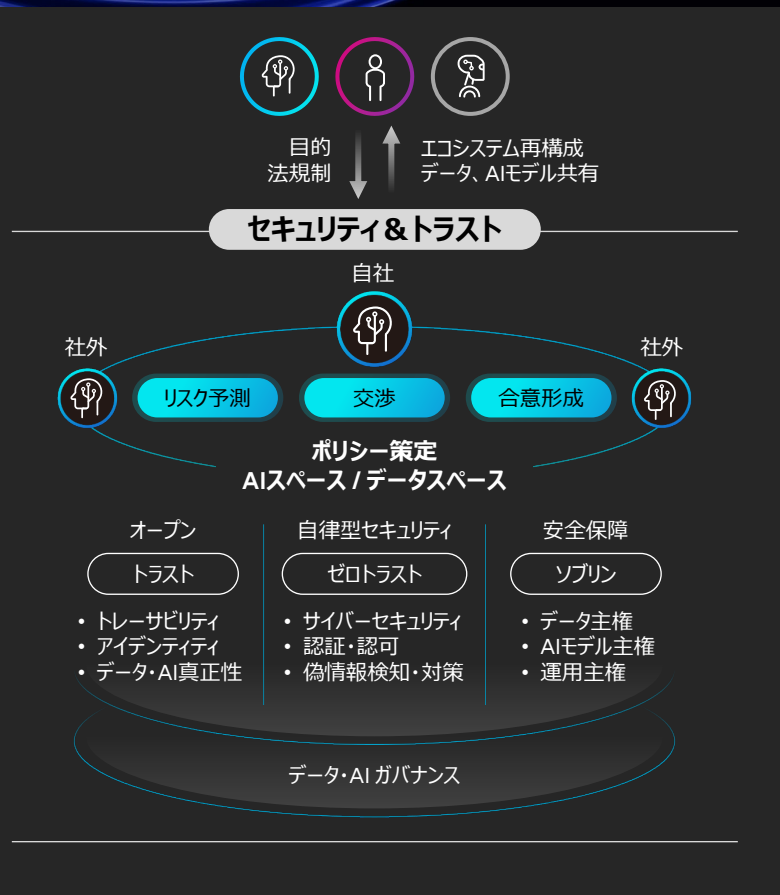
エコシステムを再編する セキュリティとトラスト

AIエージェントとセキュリティ・トラスト技術を組み合わせることで、企業はエコシステムを継続的に再編し、環境変化やリスクに柔軟に対応できるようになります。

自社のAIエージェントは、様々なリスクを予測しながら、パートナーとの連携を多角的に評価し、連携ポリシーの見直しや策定を行います。さらに、他社のAIエージェントと自律的に交渉することで、環境変化の影響を軽減し、エコシステム参加企業にもたらす価値を最大化する条件を導き出し、迅速な合意形成を支援します。

エコシステムにおける連携は、連携ポリシーと自社のデータとAIのガバナンスに基づき、セキュリティ・トラスト技術を活用して進められます。トレーサビリティ、アイデンティティなどのトラスト技術が、AIスペース上でのオープンな連携を可能にします。ゼロトラストの環境下では、サイバーセキュリティ、認証・認可技術によって、安全な交渉や取引を実施します。さらに、安全保障が求められる領域では、ソブリン性が担保されたテクノロジーやサービスを活用していきます。

わたしたちは、変化やリスクへの対応にとどまらず、組織や企業の枠を超えてダイナミックな協調を推進することが、新たな成長機会を生み出すと考えています。



富士通のR&D

ここまで、AIエージェント、コンピューティング、フィジカルAI、そしてセキュリティ・トラスト技術が、企業をどのように変革し、新たな価値を創出していくのかを紹介してきました。

富士通は、Technology-drivenの価値創造を中長期経営ビジョン2035のコアとして掲げ、お客様の成長に貢献していきます。このビジョンの実現に向けて、5つの重点技術領域をベースに、研究成果を迅速に社会実装へつなげるために、新たな研究開発体制を構築しました。AIとコンピューティングの融合に加え、フィジカルAI、量子と古典のハイブリッドコンピューティング、不可逆なリスクに対応するためのセキュリティ技術の強化を図っていきます。さらに、先端材料、宇宙データ活用の新領域にも挑戦します。

富士通は、世界トップクラスの研究成果をスピーディに創出することで、富士通とお客様企業の変革と新たな事業の創出に貢献していきます。

富士通のR&D

AI

AIアプリケーションからAIインフラまで有機的に統合し、企業と社会の意思決定を高度化

- Fujitsu Kozuchi マルチAIエージェント
- エンタープライズ向け生成AI「Takane」
- 因果AI

Physical AI

ロボットと空間を合わせて知能化し、人とロボットが協働する社会を実現

- Fujitsu Kozuchi Physical OS
- 空間知能
- ロバストVLAスタック

Computing

AIを圧倒的に効率化し、解けなかった問題を解き、科学と産業を加速

- High Performance Computing
- 量子コンピュータ
- プロセッサ：FUJITSU-MONAKAシリーズ

Security

デジタル社会の不可逆リスクに挑み、人と地球を守る新たなセキュリティ

- AIエージェント・フィジカルAIセキュリティ
- 偽情報検知・対策
- デジタルツインエージェント

5つの重点技術領域



Computing



Network



AI



Data & Security



Converging Technologies

R&Dロードマップ

富士通は、Technology-drivenの価値創造に向けて、AIの自律化、AI・量子・コンピューティングの融合、自己進化型セキュリティを中核とした最先端技術の研究開発を推進します。

これらの成果とオープン技術を統合し、社会実装を加速するとともに、AIとハイブリッドコンピューティングによる価値創造に注力していきます。

2026

2035

AI

- LLM / 基盤モデル
- 業務特化AIエージェント

- エージェント連携による組織化
知識共有・統合と知能高度化・進化
- 知識共有・連合学習・分散型協調学習

- 自己組織化ミッションクリティカルAIエージェント
変化環境で自律連携により高信頼な業務を実行

フィジカルAI

- ロボティクスプラットフォーム
- 空間ワールドモデル／アフォーダンス

- 失敗回復・分散経験共有
環境変化に適応した自律制御
- 異種ロボット協調連携

- 複数空間・ロボットの自律協調
人と協調し社会に調和する安全なロボット

量子

- NISQ（ノイズあり中規模量子計算）
- 量子古典ハイブリッドプラットフォーム

- Early FTQC / FTQC（誤り耐性量子計算）
量子優位性の獲得
- 実用的な量子アプリケーション

- 量子優位性の拡張
超大規模探索と未踏領域の開拓

コンピューティング

- CPUによるAI推論の加速と省電力化
- コンフィデンシャルコンピューティング

- HPCとAIを融合したAIスーパーコンピューティング
独自NPUとGPU密結合によるAI処理性能向上

- 先端半導体技術によるAI処理性能の飛躍
AIエージェント時代における多様なワークロードの進化を実現

セキュリティ

- エージェント・フィジカルAIのセキュリティ
- 認知戦、情報攻撃からの防御

- AI脅威ハンティング
新たな脅威の自律的な探索
- 次世代脅威インテリジェンス

- 自己進化型セキュリティ
サイバー・フィジカルの頑健性確保と不確実性に対応

エンドツーエンドのAI導入を加速

AIプラットフォーム「Fujitsu Kozuchi」

AIの価値は、個々の技術ではなく、それらを連携・統合して活用することで発揮されます。一方で、AIへの要件は業種や企業ごとに異なるため、富士通は、最適なAIを構成できるように、最先端AIをフルスタックで開発し、AIプラットフォーム「Fujitsu Kozuchi」として展開しています。

エンタープライズ向け生成AI「Takane」は、企業固有のデータを理解し、情報整理や選択肢の提示を高速に行うことで、業務効率化と高度な意思決定を強力に支援します。さらに、「マルチAIエージェントフレームワーク」により、ビジネスプロセス全体を統合し、動的な経営判断を可能にします。これらの生成AIとAIエージェントに、AIセキュリティの技術が組み込まれ、安全なAI活用を実現します。

富士通は、ロボットと空間を統合するプラットフォーム「Fujitsu Kozuchi Physical OS」の開発を加速していきます。2026年4月に、アメリカにカーネギーメロン大学とフィジカルAI領域における共同研究センターを設立するとともに、

日本に人とロボットの共存・協働を設計・検証する「Physical AI Studio」を開設しました。

富士通は、AIプラットフォーム「Fujitsu Kozuchi」を支えるオンプレミス環境向けのAIコンピューティング基盤を提供しています。さらに、NVIDIAなどのパートナーとの協業を通じて、プラットフォームの強化を進めます。

富士通は、ソプリン、フィジカルといった、業種やお客様によって異なるニーズに対応可能なAI技術群を開発するとともに、要件に応じて最適な技術や様々なサービスを組み合わせ提供します。最先端のAIを統合して、仮説検証から現場実装まで一気通貫で駆動する経営インフラとして構築し、企業の競争力強化に貢献していきます。



製造

流通

金融

公共

AIプラットフォーム「Fujitsu Kozuchi」

生成AI

大規模言語モデル
Takane

AIエージェント

AIエージェント
フレームワーク

フィジカルAI

フィジカルOS

AIセキュリティ

Agenticスキャナー／ガードレール

AIコンピューティング基盤

Private AI Platform / FUJITSU-MONAKAシリーズ

複雑な産業と社会課題に挑む

富士通の次世代ハイブリッドコンピューティング

富士通は、コンピューティング領域において、自社プロセスや量子技術をコアにしたトップクラスの技術力で、世界をリードしてきました。

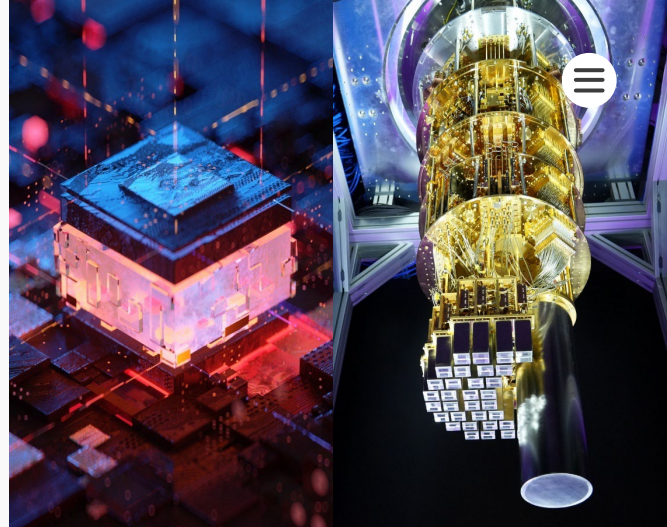
2027年に提供予定のプロセッサ「FUJITSU-MONAKA」は、エッジからデータセンターまで、性能と省電力の両立を目指しています。さらに、理化学研究所およびNVIDIAと連携して開発を進める「富岳NEXT」には、次世代の「FUJITSU-MONAKA-X」を搭載し、HPCとAIを融合した圧倒的な計算能力とエネルギー効率を目指します。富士通は、AIエージェント時代における多様なワークロードの進化を実現するFUJITSU-MONAKAシリーズの開発を加速していきます。

量子コンピューティングでは、2026年に1,024量子ビットの超伝導量子コンピュータのリリースを予定しており、将来的には1万量子ビット超の実現を目指しています。さらに、デルフト工科大学、Qutech¹とのダイヤモンドスピンに関する共同研究など、多様な量子技術の可能性を追求しています。

また、大阪大学とは、限られた量子ビット数で、より大規模な計算を可能とするSTARアーキテクチャなど、量子エラー訂正技術の共同研究を進めています。加えて、量子シミュレータや量子アルゴリズムライブラリ「Fujitsu QARP²」の提供を通じて、材料・創薬・金融分野におけるアプリケーション開発を支援しています。

さらに、共同研究や実証実験の強化に向けて、量子・HPCハイブリッド計算センターの開設を予定しています。量子・古典のハイブリッド環境により、量子機械学習やAIによるエラー訂正など、両者の強みを活かした計算能力の提供を目指します。富士通は、グローバルパートナーとともにハイブリッドコンピューティング基盤の研究開発と社会実装を通じて、複雑化する産業および社会課題の解決をリードしていきます。

1) オランダのデルフト工科大学内の量子技術研究機関。Qutech内にFujitsu Advanced Computing Lab Delftを設立
2) QARP: Quantum Application Research Package



社会課題解決

大規模シミュレーション

科学技術計算

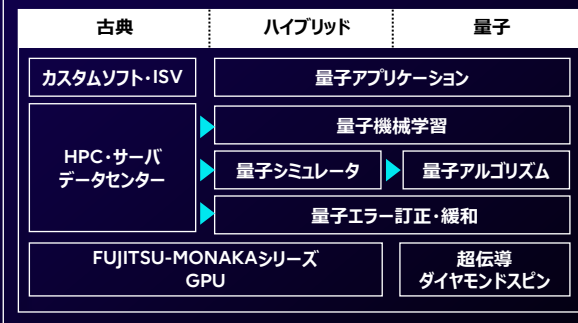
通信

製造

金融

ヘルスケア

ハイブリッドコンピューティング基盤



信頼できるテクノロジーの提供

ここまで、テクノロジーによって駆動される未来の企業への変革と、その実現に向けて富士通がAI、コンピューティング、フィジカルAI、セキュリティの各領域において最先端の研究開発に取り組んでいることを紹介してきました。

テクノロジーは、企業活動の中核へと移行しています。今後は、あらゆる企業がデータとAIを駆使して価値創出を行う時代へと進み、迅速な意思決定が競争力の源泉となります。その中で、自らテクノロジーを使いこなし、進化を続ける「テクノロジーカンパニー」へと変革する企業こそが、不確実性を乗り越え、産業の枠を超えて新たな価値を創出していくと、わたしたちは考えています。

各テクノロジーの機能や特性を正しく理解し、最適に組み合わせることで、競争優位につながる価値を創出することが重要です。富士通は、ソブリンやHPCといったテクノロジー基盤やAIプラットフォームなどの高信頼な技術を、自社のコンサルティングやサービスと組み合わせ提供することで、企業の変革と成長に貢献していきます。

企業の変革と成長に貢献

コンサルティングとサービス

製造

流通

金融

公共

AIプラットフォーム

Fujitsu Kozuchi

Takane

テクノロジー基盤

ソブリン基盤

HPC

量子コンピュータ

FUJITSU-MONAKAシリーズ

ネットワーク

富士通のR&D

AI

フィジカルAI

コンピューティング

セキュリティ



変革に向けたアクション

すでに多くの企業がテクノロジーを成長の中核に位置づけ、Dynamic transformationを推進しています。その中から、この混迷の時代においても高いビジネス成長を遂げる企業が現れ始めています。

ここからは、テクノロジーによって大きく変革していく産業分野の未来像を紹介するとともに、AIを活用してビジネス成果を上げるために企業が取るべき具体的なアクション、そして変革のパートナーとしての富士通の取り組みをお伝えしていきます。

テクノロジーがもたらす産業の変化：製造・流通

テクノロジーの進化は、個々の企業にとどまらず、産業全体の仕組みそのものを大きく変えていきます。Dynamic transformationが製造や流通などの各産業に広がることで、

これまで当たり前とされてきた業界の常識や、競争の前提となるルールは根本から見直されていきます。

製造の現場では、人・AI・ロボティクスが協働し、仮想空間での検証結果がリアルタイムに反映されています。さらにアディティブマニファクチャリング¹により、設計変更や再生産が即座に可能となり、製造業は個別ニーズへの対応や稼働率を保证するアウトカム・エコミー²へ移行していきます。

製造

ものの販売から価値を提供するサービス型モデルへ移行する

75%



わたしたちのミッションは、製品製造企業からソリューション企業へと変革することです。³

Chief Digital Officer
製造、アメリカ

1) 3Dプリンティング技術により、材料を積層して立体物を作る製造技術
2) 製品そのものではなく、「利用によって得られる成果」に対して価値や対価を支払う経済モデル

流通業は、地産地消型、かつ自動化されたサプライチェーンを基盤に、人の暮らしを先回りして最適化する社会インフラへと変わっていきます。製品は、「売り切るもの」から「循環させる資産」へと変わり、小売業は製品を保管・回収・再配置するマテリアルバンクへと進化していきます。

流通

AIエージェントによって、人のニーズを事前に予測した購入が行われていく

86%



AIは販売数量と需要の予測分析を行い、リソースの最適な配置を可能にします。

サプライチェーン担当SVP
運輸・物流、中国

3) 2025年10～12月に、富士通がBusiness Advantage Group Limitedに委託し、CxOに対して実施したインタビューから引用

テクノロジーがもたらす産業の変化：金融・公共

金融や公共分野においても、Dynamic transformationによってビジネスシステムやプロセスが進化し、よりレジリエントなビジネスや社会が実現されるようになります。

このように社会や産業が大きく変化の中で、企業が変革をさらに加速するために、どのような取り組みが求められるのでしょうか。

金融

AIによる経済活動が
金融の中心になっていく

82%



金融サービスは、AIモデルやデータを活用した金融商品やサービスの提供を通じて、各産業のインフラを支える存在へと進化していきます。さらに、自律型AIの収益を基盤とした金融商品が広がり、AI経済を資本とする新しい金融市場が形成されていきます。

‘

AIを新たな技術革命だと捉えており、AIがそれをもう一段大きく変えていくと考えています。

Chief AI Officer
大手銀行、カナダ

公共

住民一人ひとりにAIが
寄り添い、職員は複雑な
業務に集中する

78%



公共分野では、データとAIの活用によって、住民一人ひとりに最適なサービスが提供されるようになります。また、社会データ¹⁾を反映したデジタルツインと生成AIを活用したシミュレーションに基づく政策によって、透明性の高い行政運営が実現していきます。

‘

データに基づいて判断することは、より良い意思決定につながります。

Chief Human Resource Officer、
公共分野、アメリカ

1) 政府が収集・公開するオープンデータや、SNSなどのソーシャルビッグデータ

Dynamic transformation推進の鍵

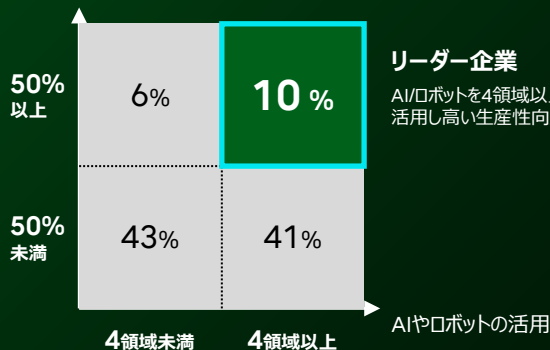
社会や産業が大きく変化する中で、企業はDynamic transformationを加速し、テクノロジーの適用領域の拡大と生産性の向上に取り組んでいます。では、テクノロジーを革新の力に転換できた企業はどれほどいるのでしょうか。

富士通の調査によると、AIやロボットの活用自体は急速に広がっており、約半数の企業が複数の業務領域¹⁾での取り組みを進めています。しかし、複数の業務領域でAIやロボットを活用する企業の中で、平均して50%以上の生産性向上を実現しているリーダー企業は、全体のわずか10%にとどまっています。

この10%と残り90%の差は、どこから生まれるのでしょうか。テクノロジーをビジネス成果に結びつけるために企業が取るべきアクションについて、見ていきます。

リーダー企業の実態 サンプル数：1,000

生産性の向上



リーダー企業

AI/ロボットを4領域以上で活用し高い生産性向上を実現

1) AI/ロボットの活用が想定される10の領域

- 顧客対応の自動化
- コーポレート業務の自動化
- 経営意思決定の高度化
- 需要予測・発注業務の自動化
- 商品やサービスの強化
- 製造作業の自動化
- 倉庫業務の自動化
- 店舗・対面業務の自動化
- 物流・配送の自動化
- 保守・点検業務の自動化



変革を実現するキーファクター

富士通の調査から、成果を上げるリーダー企業に共通する特徴が明らかになっています。1つ目は、AIを経営の中核に据える「戦略」、次にAIの力を最大化する「人材」、そして3つ目がビジネスを加速し、新たな知識を生み出す基盤としての「テクノロジー」です。リーダー企業は、これらすべての要素において、その他企業を大きく上回る成熟度を示しています。

変革を実現するもう1つの重要な鍵が「セキュリティ」です。富士通の調査でも、情報漏洩などのセキュリティリスクが、AI導入における最大の課題となっています。これから、戦略・人材・テクノロジー・セキュリティにおけるリーダー企業の特徴と富士通の実践例を基に、企業が取るべき具体的なアクションを明らかにしていきます。

01

戦略

パーパスとAIで経営を駆動する

02

人材

AIが根付く文化をつくる

03

テクノロジー

テクノロジー基盤でAIの活用を広げる

04

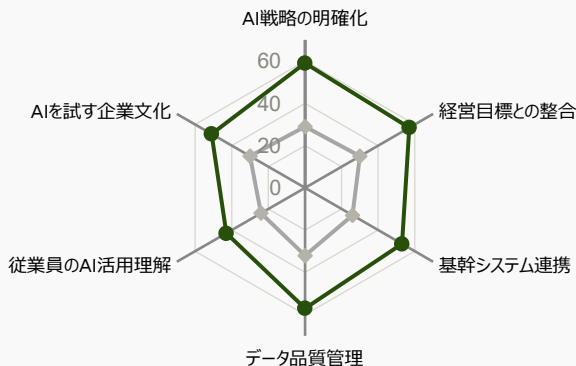
セキュリティ

攻撃者視点でセキュリティを強化する

戦略・人材・テクノロジー

AIの取り組みに対する成熟度（同意率）

● リーダー企業 ◆ その他企業 サンプル数：1,000



セキュリティ

AI導入時の課題

サンプル数：1,000

- 1位 情報漏洩・セキュリティに不安がある
- 2位 AIを活用できる人材が不足している
- 3位 初期投資や運用コストが高い
- 4位 AIの成熟度が十分ではない
- 5位 データが十分に整備されていない



01

パーパスとAIで 経営を駆動する

変化が常態化する中、テクノロジーを活用することで変化に対応し、それを長期的な目的の達成につなげていくことが、持続的な企業成長の鍵となります。富士通の調査によると、リーダー企業は、長期的な目標の進捗と短期的な財務指標の改善を両立させていることが明らかとなっています。

富士通は2026年5月、2035年を見据えた中長期経営ビジョン2035を発表しました。パーパスの実現に向け、テクノロジーを基盤とした2つの価値創造に取り組めます。

①AI-drivenの実践

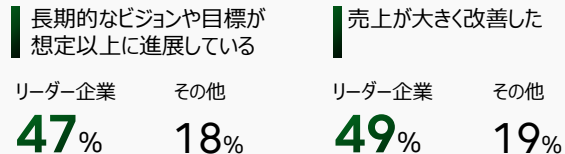
すべてのサービスをAIで駆動させて、事業モデルの転換を加速するとともに、富士通自身の変革で得た知見を活用し、お客様の変革を支援します。

②信頼できるテクノロジーの提供

高信頼なテクノロジー基盤で社会・お客様の成長に貢献するとともに、将来の中核事業を確立し、社会の安全と信頼を支える役割を担います。

変化への対応と長期的な価値創出を切り離さずに捉え、テクノロジーを単なる効率化の手段ではなく、価値創造の中核として位置づけることが、企業の持続的な成長につながっていきます。

リーダー企業は、長期・短期の価値創出を両立



サンプル数：1,000

富士通の取り組み：中長期経営ビジョン2035



富士通のパーパス

イノベーションによって社会に信頼をもたらし
世界をより持続可能にしていく

Technology-drivenの価値創造

①AI-drivenの実践

- ・ 事業モデルの転換
- ・ お客様の変革を支援

②信頼できるテクノロジーの提供

- ・ お客様の成長に貢献
- ・ 社会の安全と信頼を支える役割を担う

02 AIが根付く文化をつくる

従業員がAIを積極的かつ適切に活用する仕組みや文化を築くことが重要です。富士通の調査によれば、AI活用を後押しする文化を醸成し、従業員が適切な活用方法を理解しているリーダー企業は、雇用削減ではなく、人とAIが共に成長する環境の構築に成功しています。

富士通も、個人レベルの活用から組織レベルでのAI活用への転換を目指し、全社AI実践イニシアティブを立ち上げました。2030年に向けて、業務プロセスとの統合、AI前提の経営、そして人とAIの共存を実現するロードマップを描き、AI人材の育成とAI活用が根付く文化の醸成を進めています。すでに、生成AIの社内アクティブユーザは約80,000名に達しており、AI実践のノウハウ共有や相互支援を目的とした社内SNSコミュニティには8,000名以上が参加しています。

また、AIの適切な利用に向けた取り組みも強化しています。「富士通グループAIコミットメント」に基づいて、AI倫理に関するガバナンス体制を構築し、生成AI利活用ガイドラインを策定するなど、全社的な取り組みを進めています。

AIの価値は、使う人によって決まります。スキル・文化・ガバナンスを一体で設計し、組織としてAIを活用する体制を構築することが競争力の鍵となります。

リーダー企業は、人とAIが成長する環境を創出

従業員満足度が大きく改善した



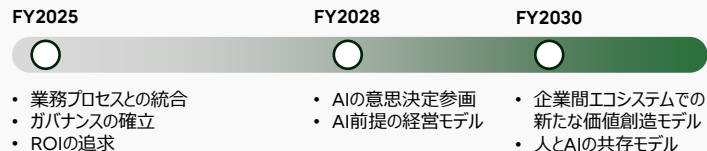
従業員とAIやロボットが協調しながら、共に成長



サンプル数：1,000

富士通の取り組み：人材ポートフォリオの進化

AI活用ロードマップ - 組織レベルのAI活用、人とAIの共存を目指す



全社AI実践イニシアティブ

生成AIアクティブユーザ

約 80,000名

社内SNSコミュニティ

約 8,000名

AI倫理のガバナンス体制

富士通グループAIコミットメント

富士通生成AI利活用ガイドライン

03

テクノロジー基盤で AIの活用を広げる

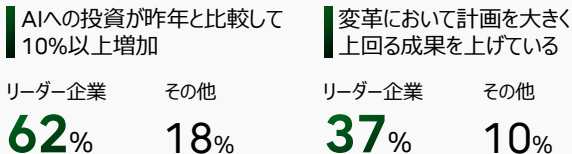
既存システムとAIの連携、およびデータ品質の確保は、AI活用における価値創出を最大化するための前提条件です。富士通の調査によれば、AIと基幹システムを連携させ、データ品質を継続的に維持・管理しているリーダー企業は、AIへの投資からより大きな価値創出を実現しています。

富士通においても、業務システムやソフトウェア開発にAIを組み込み、価値の最大化に取り組んでいます。サービスデスクでは、AIエージェントによる一次対応の高度化により、プロセスの75%が自動化されています。さらに、経営の意思決定支援や提案資料の作成にも、その適用範囲を拡大しています。

またソフトウェア開発においては、要件定義からテストまでを自動化する開発基盤を構築し、すでに自社ソフトウェアの改修では、3人月の作業を4時間に短縮するなどの成果を上げています。今後は、ヘルスケア・行政分野のすべてのソフトウェア製品に適用し、さらには全システム開発へと本基盤を展開し、変化を続けるビジネスに追従できるシステムの構築を全社規模で推進していきます。

単なるAI導入ではなく、データとシステムを含めた全体設計に踏み込むことが、競争優位の分岐点となります。

リーダー企業は、AIへの投資を拡大し、価値を創出



サンプル数：1,000

富士通の取り組み：AI駆動ソフトウェア開発

- 2025年度 ソフトウェア改修作業で評価
- 2026年～ 自社ヘルスケア・行政の全67パッケージソフトウェアに適用
- 2026年度 適用領域をすべてのシステム開発に拡大



04

攻撃者視点でセキュリティを強化する

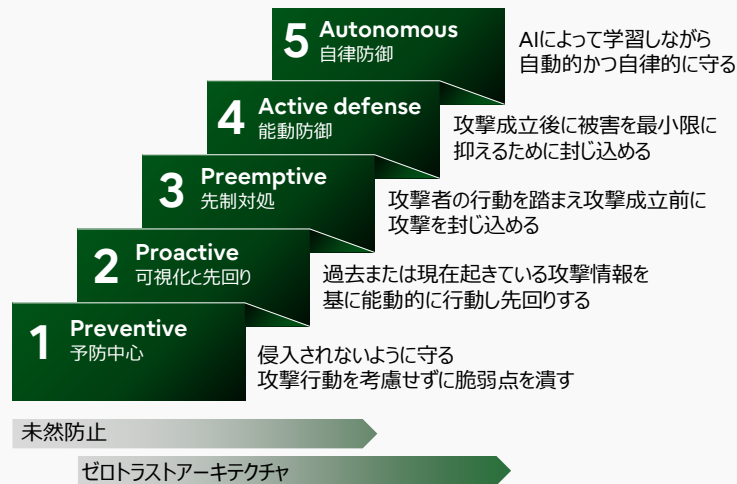
ソフトウェアに潜む脆弱性を高精度に発見するAIの登場により、サイバー攻撃は既存の対策では対応困難なレベルへと高度化しています。企業価値を左右するこの脅威に対し、ゼロトラストを前提としたセキュリティ対策が不可欠です。

AIの進化により攻撃スピードが飛躍的に高まる中、富士通はセキュリティのあり方を「5つのステージ」で整理し、攻撃者視点でのセキュリティ強化を進めています。サイバー攻撃を防ぐために、攻撃者と同等の脅威情報を活用して、インターネット側から見える攻撃口を先回りして不可視化すると共に、当社資産を擬似的に攻撃する検証も併せて実施しています。さらに攻撃者の行動を観察して封じ込める「ゼロトラストアーキテクチャ防御」の実現に取り組んでいます。

富士通は、脅威情報、AIによる脅威検知・是正措置などを活用し、侵入防止・検知・封じ込めの各領域における防御力を強化しています。これらを重ね合わせた多層防御によって、侵入後の攻撃に対して、事前に出口対策を組み込み、検知速度を向上させることで、被害の無害化や最小化が可能となります。

AIによる攻撃には、AIで対抗する自律的・リアルタイムな防御が求められます。テクノロジーの進化と攻撃の動向を踏まえて、適切に脅威を認識し、リアリティを持って対策に向き合い続けることが求められています。

富士通の取り組み1：ゼロトラストアーキテクチャの構築



富士通の取り組み2：侵入を前提とした多層防御

侵入防止

- ①脅威情報活用による脆弱点の先回り対処
- ②多要素認証とWEBアイソレーション

侵入検知

- ①ユーザーおよびエンティティ行動分析 (UEBA)
- ②全端末EDR¹導入及びログ統合監視

封じ込め

- ①アプリケーションのアウトバウンド通信制御
- ②データプロテクションによる漏洩無害化

1) Endpoint Detection and Response：デバイスを監視し、サイバー攻撃を検知・対処

実践をベースにAI-drivenへの変革をリード



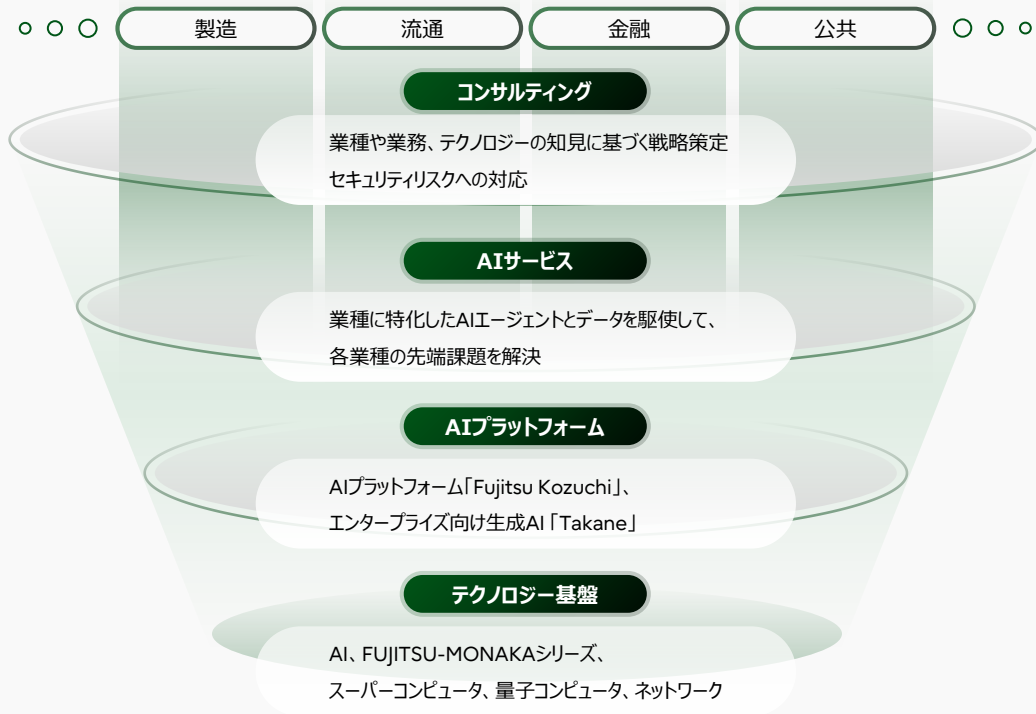
富士通は、「戦略」「人材」「テクノロジー」「セキュリティ」を中核に、企業活動のあらゆる領域においてAI-drivenへの変革を進めています。そして、この取り組みから得られた変革の実践知と富士通が持つ業種や業務のノウハウを組み合わせることによって、企業のAI-drivenへの変革をリードしていきます。

そして、社会や企業に向けて、「変革のコンサルティング」「業種知見に基づくAIサービス」「経営を高度化するAIプラットフォーム」をトータルに提供していきます。

変革のパートナー

富士通は、AIやCPU開発技術、光ネットワーク技術を一社で有し、スーパーコンピュータや量子コンピュータの実機マシンを開発できる世界で唯一のテクノロジー企業です。

これらの高信頼のテクノロジーを基盤に、コンサルティング、AIサービス、AIプラットフォームをEnd to Endで提供し、テクノロジーで駆動する企業変革を先導するパートナーとして、お客様のDynamic transformationを支援していきます。



世界中のお客様とともに



パブリックコメントのAI分析

中央省庁 (日本)

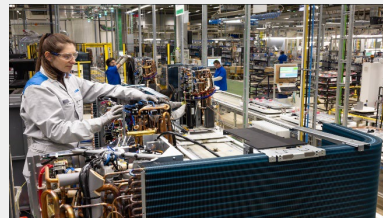
中央省庁のパブリックコメント業務において、富士通の大規模言語モデル「Takane」を利用した実証実験を行い、業務効率化と品質向上の有効性を確認しました。意見の分類や要約、法令案との整合確認を自動化することで、行政運営の高度化を支援できる可能性が示されました。この成果を踏まえ、公共分野におけるAIの活用にご貢献していきます。



AIによる高齢者の歩容解析

Acer Medical (台湾)

Acer Medicalは同社のモバイルソリューションに、富士通の骨格認識AI技術を組み込み、高齢者の歩容の異常を可視化する開発に取り組んでいます。スマートフォンやタブレットで撮影した動画から高精度な解析を行い、医療従事者の業務負担を抑えながら、客観的な評価を実現します。こうした取り組みを通じて、ヘルスケア分野のAI活用を推進しています。



製造のデジタルイノベーション

Daikin Europe (ヨーロッパ)

Daikin Europeでは、AIの普及に伴い拡大するIT環境を、業務に支障をきたすことなくどう変革するかが課題となっていました。富士通とMicrosoftとともに、30カ国・130以上の拠点にまたがるIT環境をモダナイズし、AI駆動型サービスの基盤となるハイブリッド・マルチクラウド環境を構築。移行はシームレスに行われ、効率性を高めつつ、戦略的施策への注力が可能となりました。



AIで在庫フローを最適化

Lowe's (アメリカ)

Lowe's Innovation Labsは、富士通とともにAIと量子インスパイアード最適化技術を活用し、物流ネットワーク全体の在庫フロー平準化とボトルネック解消に取り組みました。機械学習と高度な最適化を組み合わせた検証を実施し、ピーク時の在庫流入を30%削減、業務効率を10%向上しました。その結果、欠品の抑制や配送の安定化にも効果を示しました。

2035年の世界に向けて

富士通は、「Fujitsu Technology and Service Vision」を通じて、2023年より「Regeneration（再生）」をキーワードに、テクノロジーを活用し、環境や社会から得た価値に対して、それを上回る価値を創出する企業への変革にどのように貢献できるかを提示してきました。不確実性が一層高まる中であっても、企業が目指すべきこの方向性は変わりません。

富士通は2035年に向けて、人の能力や可能性の拡張、地球のあらゆる活動のシミュレーション、データ主権と高度なセキュリティに基づく情報の安全保障をテーマに、その実現に向けた貢献を果たしていきます。そして、自らの変革を進めるとともに、テクノロジーを活用したDynamic transformationを支援していきます。さらに、お客様やパートナーと協力し、テクノロジーの社会実装を通じて、安心安全で豊かな世界を築いていきます。

Regeneration

2023

企業がテクノロジーを活用し、環境や社会から得た価値を上回る価値を創出

Dynamic transformation

2026

人とAIが協働して「実験と学習」のサイクルを回し、ビジネスシステムを動的に再構成

安心安全で豊かな世界

2035

人の能力や可能性の拡張
地球のあらゆる活動のシミュレーション
データ主権と高度なセキュリティに基づく情報の安全保障

富士通株式会社

〒211-8588 神奈川県川崎市中原区上小田中4-1-1

<https://global.fujitsu/ja-jp/>

商標について

記載されている製品名などの固有名詞は、各社の商標または登録商標です。

将来に関する予測・予想・計画について

本冊子には、富士通グループの過去と現在の事実だけでなく、将来に関する記述も含まれていますが、これらは、記述した時点で入手できた情報に基づいたものであり、不確実性が含まれています。したがって、将来の事業活動の結果や将来に惹起する事象が本冊子に記載した内容とは異なったものとなる恐れがありますが、富士通グループは、このような事態への責任を負いません。読者の皆さまには、以上をご承知いただけますようお願い申し上げます。

「Fujitsu Technology and Service Vision」の一部または全部を許可なく複写、複製、転載することを禁じます。

このコンテンツは画像生成AIを用いて制作されました。